

「吃音」と共に

天理市立福住中学校 2年 山和 大希

皆さんは「吃音」という言葉を知っていますか。世の中にはコミュニケーションが苦手な人がいます。その原因の一つに吃音があります。僕は言葉がつかえてしまう吃音です。

吃音と聞くと病気を連想するかもしれませんが、病気でも障害でもありません。ただ、人と話すときに言葉が出にくくなってしまふという人間の特性の一つです。吃音の決定的な治し方はありません。成長するにつれて治ったり症状が軽くなったりすると言われていますが、一生治らない人もいます。僕は、何かを早く家族に伝えたいときや興奮しているときに、最初の一音が繰り返して出てきて、スムーズに話せません。吃音が出たときはもどかしく、気持ちがしんどくなったり、相手に伝わらずに面倒くさくなったりします。学校でも時々吃音が出ますが、友達が優しく接してくれているので、それほど悩んではいません。

しかし、家庭や学校以外の場所ではそうもいきません。僕は、陸上のクラブチームに入っているのですが、そこでからかわれたことがあります。例えば、吃音が出たとき、吃音の真似をして返されたり、また、

「なんでそんなしゃべり方なん？」

と興味本位で聞かれたりもしました。そんなときはとても腹が立ち、心が傷つきました。そして、深く悩みました。「スムーズに話せるように頑張ろう」と焦れば焦るほど余計にしゃべれなくなり、その結果、またからかわれるということの繰り返しでした。

ある日、母に連れられ、リハビリテーションセンターに行きました。初めは嫌でしたが、行ってみると、先生がとても優しく接してくださり、とても楽しいところでした。

そこでは、まず吃音についての説明を受けました。吃音にはいろいろなパターンがあり、自分がどれに当てはまるのか知ることができました。僕は「連発」というパターンでした。言葉の最初の音が出ず、同じ音を繰り返

し発してしまうというものです。僕は、それをなくすために言いやすい言葉に置き換えたり、言葉を読んだりする練習もしました。

しかし、すぐには上達しません。そんな時でも、先生がとても優しく接してくださったのでうれしかったです。上手に話す練習も兼ねて、学校の出来事などを先生に伝えたりもしました。それについてアドバイスや共感もしていただき、気持ちが和らぎました。月に1回ぐらいそこに行くのですが、その日がとても楽しみになりました。

子供の20人に一人、大人では100人に一人の割合で吃音をもっている人がいるそうです。それを知ったときは、残りの99人になりたかったなと思ったりもします。でも、田中角栄さんや作家の重松清さんも吃音だったようですが、二人とも努力して世間で有名になりました。僕は、吃音だからといって目立たないようにするのではなく、吃音を恐れずにみんなと接していこうと思い直しました。

これからも僕は、吃音と共に生活していかなければなりません。大人になって治るかどうかもわかりません。僕は今のところは楽しく生活していますが、進学先で吃音を知らない人からかわれることがあるかもしれないと思うと、少し不安です。

吃音は、なりたくてなったものではありません。それをからかったりすると、吃音の人は言葉が出にくくなり、最悪の場合は心を閉ざしてしまうこともあります。だから、絶対に真似をしたりからかったりしないでください。普通に接してくれるだけでいいのです。

僕はリハビリテーションセンターで練習して、少しでも状態を良くして自分の思いをわかりやすく伝えられるようになりたいです。これからは、吃音を自分の特性としてしっかり心に留め、堂々と生活したいです。